



上は天井に渡した梁と桁。梁の太さによって柱の長さが変わるので、それをひとつひとつ計算しながら組んでいった。右は廃材と木の枝を組み合わせたキッチン棚。見せる収納。



キッチンも手作り。古い昭和的ステンレスキッチン(廃材)のシンクを切り出し、木の枠にはめ込んで周りを化粧した。引き出しの取っ手は自然木。照明はリサイクルショップで数百円。



浴槽はヒノキ。ネットオークションで程度のいい中古の格安安品を手に入れた。左はケヤキの柱に刻まれたホゾ穴に手をかけて上り始める長女(6歳)。



**かかった費用は200万円  
建築期間は3年10カ月**

2011年、東京郊外の住宅地から茨城県筑波山麓の農村に移した。住まいはちょっと傾いた古民家で、あれこれ問題があり直しながら住んでいたが、それでDIYにハマった。加えて、酔々な友人が自宅をセルフビルドしていたこともあり、いずれ自分も家を建てようという思いが芽生えていた。そんなある日、近所で古い農家住宅を解体している現場を通りがかった。

やら向こうも処分代が浮くので助かるようだった。複雑な仕口が刻まれた7寸のケヤキの柱や7間もある一本物のマツの桁など、立派な材料がタダで手に入ったのである。

早速、適当な設計図を描いて加工を始めたが、材料はさまざまもささまざまな丸太で、それはさきも形も細み上がるように考えて刻むのに骨が折れた。棟上げは友人知人を呼び集め、人力で完遂。建築期間は3年10カ月。費用は約200万円。3間×6間のちっぴけな平屋だが、トイレと浴室以外間仕切りのないワンルームで、空間的には広々している。最近、2間×2間の玄関兼作業場を増築した。それまで住んでいた古民家から

この古くて新しくセルフビルドの家に移ったのは一昨年の12月。といって、それで家が完成したわけではない。20年で古くなる家が一方、木の家は年を重ねて、手を加えていくことによって快適さを増し、また味わい深くなっていく。床は艶やかに輝き、壁はあめ色に染まる。子どもの落書きも、柱の傷も、そのままでもいいと思えるのが木の家だ。

自分で家を建てるということは、自分で生活を作ることなのだと思う。だから、こういう家に住んでくるとヒマすることがない。作らなくちゃいけないものはたくさんあるし、畑の野菜や庭の木々は季節を待つてはくれない。クリエイティブでアウトドア。そういう生活が楽しいんです。



上は薪ストーブが置かれたリビング。コロナ禍の今だが、田舎の暮らしはそれまでと大きく変わらない。春先学校が休みだったときも子どもは庭を走り回り、畑で遊んでいた。エネルギーは発散していた模様。右はフリースペース。収納は写真にある古箆箆だけ。布団も納まっている。寝るときはここで川の字になる。



夫婦と子ども3人の5人家族。家の前には約100坪の家庭菜園。ヤギやニワトリも飼っている。

## [茨城県石岡市／和田邸] セルフビルドした住まいで 作る暮らしを楽しむ

フリーライターの和田義弥が、DIY好きが高じて自ら建てたセルフビルドの我が家は、解体した古い民家の柱や梁を材料にした廃材建築。壁の落書きも柱の傷も気にしない。時を重ねるほどに味わい深くなっていく木の家の魅力と、そこで育まれる暮らしとは？

写真／阪口 文／和田義弥



左は最近増築した玄関兼作業場。春先、コロナ禍で時間ができたときに一気に仕上げた。材料はやはりほぼ廃材で屋根は草屋根。右は住まいの全景。ウッドデッキは2間×6間ある。

